

① 研究課題

被殻出血患者の血腫量と治療アプローチの違いが急性期の機能予後に与える影響

② 研究等の目的・概要

研究デザイン: 観察研究(後方視的縦断研究)

被殻出血は、全脳出血のうち約60%程度と最も頻度が高い損傷領域による出血病変です。被殻領域の出血は、血腫量が多くなると炎症や圧排による脳組織の障害がより高度となり、運動麻痺の改善が不良と報告されています。血腫量と運動麻痺の程度に関する機能予後につきましては、発症から6ヶ月後には日常生活動作能力に差が現れるとも報告されており、被殻領域の血腫量は機能予後の帰結を予測する一つの因子ともなります。ただし、急性期の期間における血腫量と運動麻痺や日常生活動作能力に障害をきたす神経運動機能の重症度との関連についてはまだ検討が少ないのが現状です。さらに、運動麻痺によるその影響を受けた上肢の機能的回復は、リハビリテーション医療の関心事の一つであるにも関わらず、血腫量と上肢機能を関連付けた報告は症例報告で散見される程度しかありません。被殻出血による血腫量と運動麻痺の機能予後に関する研究は、年齢が機能予後に与える影響や動作能力の差について検討されています。したがって、本研究では、被殻出血患者を対象に血腫量と急性期期間におけるリハビリテーション治療開始時と終了時の上肢運動麻痺の程度、神経運動機能の重症度との関連性を検討し、リハビリテーション治療が急性期期間の機能予後の帰結に与える影響を検討することが目的です。

③ 主任責任者

橋本市民病院 リハビリテーション科 作業療法士 佐藤 将人

④ 研究期間

2022年10月～2024年3月

まで

⑤ 研究等の対象、実施機関及び実施場所

対象: 2018年4月～2021年3月の期間に当院脳外科病棟へ入院された初発の脳出血患者のうち、リハビリテーション治療を受けた被殻出血病変の33名。
除外基準: 脳浮腫や血腫の再吸収時期を考慮して、発症から15日以内に退院(死亡を含む)または転院した者。

研究期間: 2022年10月～2024年3月

実施機関: 橋本市民病院 リハビリテーション科

⑥ 研究等における倫理的配慮、人権擁護及び個人情報の保護について

通常業務と同様の個人情報保護に最大限の努力を払い、本研究を行う上で知り得た個人情報を正当な理由無く漏らしません。本研究で取得するデータは、すべて匿名化して個人のパソコンを使用し、別付けのハードディスクに保存します。また、パソコン内にデータが残らないようにし、ハードディスクの保管は個人の鍵がかかる保管庫に保管します。研究が終了した時には、すべてのデータをCD-Rに移行し、総務課へ提出いたします。公表に際しては、個人情報が直接公表されることがない等、研究対象者の個人情報の保護については十分に配慮いたします。

⑦ 本研究に関するお問い合わせ先

橋本市民病院 診療技術部 リハビリテーション科 佐藤 将人 (TEL 0736-37-1200)